

花 き

<花 き>

1 抑制作型トルコギキョウ

(1) 光量確保

9月に入ると日の長さはだいぶ短くなり、日射量が弱くなってきます。10月以降出荷する作型はこの時期の日射量がとても貴重です。日射量が足りないと脇芽が発生しなかったり、できた蕾が成長しないことも多くなります。8月の盆を過ぎたら日当たりを重視し、遮光資材は外し、株に十分日を当てることが必要になります。また、南北方向に向けた施設では、骨材やまとめたカーテン等によりいつも同じところが日影となりがちなので注意します。



トルコギキョウほ場 (9月中旬)

10～11月の秋の需要期に計画的に出荷するためには、施設内の最低夜温は15℃以上をキープしたいものです。15℃を下回るようになったら、夜間はハウスを閉めその後の気温低下に合わせて、保温や暖房機を利用します。なお、施設を閉め切ると湿度が高まり、灰色かび病による花卉のシミ等の原因となります。このとき扇風機や循環扇、暖房機を利用して空気を動かすとともに、朝は早く施設を開けて、換気を行います。

(2) 水分管理と肥料

花芽分化時に土壤水分と肥料が多すぎると草丈が伸び、枝数も多くなるが、茎が非常にもろく折れやすくなります。また、水揚げが悪くなります。花芽分化が始まった時点から土壤水分や肥料(窒素肥料)を徐々に控える管理を行います。急激に土壤水分や肥料を控えると、枝数が減り、着蕾数も減少し、茎折れの原因にもなりますので注意します。

(3) 葉先枯れ対策

上位節の柔らかい葉先がカルシウム欠乏により枯れこむ障害が出ます。品種間差も大きいですが、曇天降雨後の晴天による急な生長による転流のバランスの乱れや、高昼温による地上部と地下部の生育バランスの崩れが原因です。晴天時の遮光資材の活用やハウス内換気の徹底による発生予防を行います。また、生長点が枯れこんでしまった場合は早急に脇芽を利用するよう摘み取ります。

(4) 仕立てと品質向上

出荷のとき必要のない下部から出る芽は小さい内にかいておくと、元の茎の生育が旺盛となり、品質が高まります。ただし、これからの時期は脇芽が出にくい環境になるので、確実に枝数を確保できる位置から下を除きます。また、切花後に、開花する見込みのない小さい蕾は、ほ場で早目に除くことで花茎が硬くしっかりし蕾や花も充実した商品に仕上がります。

2 リンドウ

(1) 切り花後の管理

花の咲いた花茎をそのまま放置しておくと、やがて種になります。養分は種へと送られるので、株への貯蔵養分は減少します。このため次の年の栄養分が不足して、思うような切花が得られないことがあります。繁忙期とはなりますが、せめて花の着いている上部を折り取ることをお勧めします。また、切花の終わった株を健全に保つことが重要ですので、干ばつ時にはかん水を行うとともに、アブラムシ類・葉枯病を中心とした防除や雑草対策も忘れずに行いましょう。

3 シャクヤク

(1) 土作り～定植

発根・活着期間を考えると、9月下旬～10月上旬が、購入苗、株分け苗の定植期となります。株更新にあたっては、品種別の市場動向や配色バランスに配慮した導入を進めてください。

シャクヤクは、土壌病害虫（根頭がんしゅ病、紋羽病、根黒斑病、ネコブセンチュウ等）の発生が多いことから、連作を避けるか土壌消毒を必ず行ってください。また、一度定植すると5～6年そのまま栽培を続けるので、有機質の投入や深耕、高うねなど滞水対策を事前にしっかり行い、無病苗を植え付けます。

床幅は50～70cm、通路50～60cmとし、株間50～70cmの1条植えが目安で、定植は芽の基部がやや隠れる程度の浅植えとし、根が長いので植え穴は深めとしてください。また、定植後は、たっぷりとかん水し根と土を密着させ、活着促進を図ってください。

(2) ほ場の準備

10a 当り粗大有機質を3～4 t 施用し、土壌 pH は6～7に矯正します。1年目の施肥量は窒素・リン酸・カリ成分で5kgを目安としてください。

(3) 株分け

定植後、6～7年経過すると芽が必要以上に多くなり、切花品質が劣ってくることから、株分けして植え替えます。9月下旬～10月上旬に、鋭利な刃物を使い、芽を3～5個付けて切り分け、乾燥しないうちに直ちに植え付けます。植え付け時には殺菌剤の浸漬処理を行います。

